

高13期 朽名桐世氏

～神秘的な輝きを放つ織物の宝石～



鎌倉にお住まいの朽名さん(高13期・旧姓嶋野)は、若い頃出会った佐賀錦織に 創意工夫を加えて、二十数年前、独特の「桐世織」を生み出しました。それはいったいどのような織物なのか？好奇心旺盛な事務局の3人組(斎、杉村、サラン)は、デジカメ片手に早速お宅訪問に参りました。

緑濃い鎌倉山の一角に「桐世ギャラリー」と名付けられたモダンなお宅がありました。ドアを一步入るとそこは別世界、その佇まいとマッチした画廊風のリビングには朽名さんが作り貯めた作品の数々が飾られていました。

伝統的な淡い色あいの佐賀錦の枠を超えた、色とりどりの輝く糸達が織り成す様々な文様。個性を主張するはずの強い色調の糸どうしが不思議な調和を見せて、そこには神秘的ともいえる宇宙的な美の世界が広がっていました。



スポーツ万能で、若い頃はテニスやヨットに 夢中、子育てが一段落してから始めたことや、「仕事としてではなく、本当に自分の作りたいものだけを作ってきたの」と気さくに、あくまで趣味の手仕事と謙遜される朽名さん。

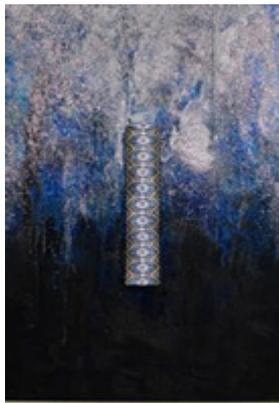
しかし、個展を開いて作品を発表してゆくうちに、その芸術性の高さは海外にまで知られて行ったのです。シンガポール、ニューヨーク、パリでも個展を開き、サロン・ドートンヌにも入選、なんと、今ではホワイトハウス(資料館)やメトロポリタン美術館にまで作品が収蔵されるという 快挙を成し遂げたのですから、驚くほかありません。



作品は抽象画のような額装の織物から、バッグや手鏡、アクセサリまで

幅広く、そこかしこに桐世織ならではの独創性が伺えます。

ブルネイ王のご注文による靴の制作が次の課題だそうです、1日3センチ程しか織れず、完成するのに何ヶ月もかかるうえ、材料の金やプラチナ、漆の糸を作る職人も後継者不足で、大量に制作でき



ないのが現状。

あといくつ満足のできる作品が生み出せるか、「百年後、アンティークショップで作品が飾られていたらうれしい…」と一つ一つの作品を愛おしみながら、今日も丁寧な手仕事を続けていく朽名さんに感服



の3人でした。

朽名さんの作品をご覧になりたい方は広場宛にメールでお申し込みください。

お取次ぎをいたします。

